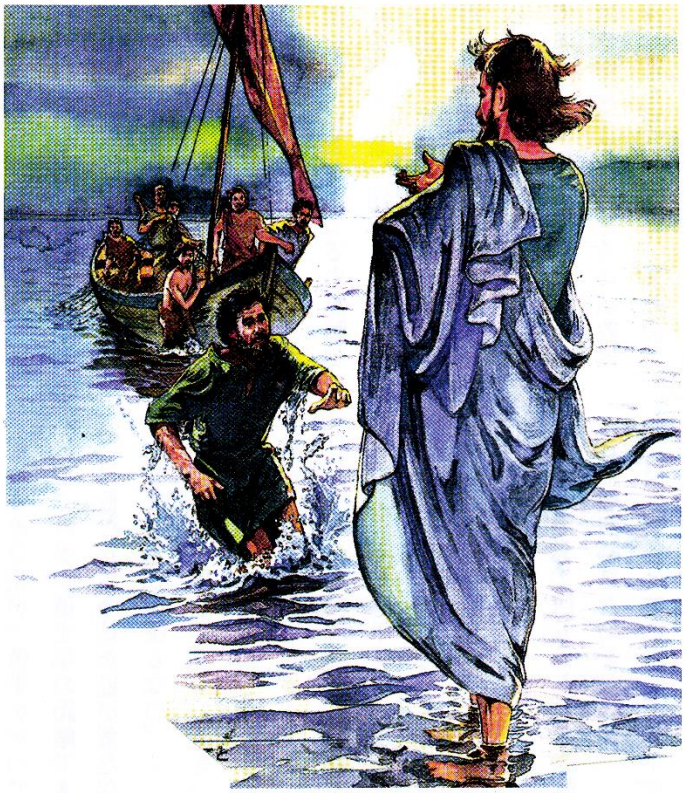
あかしびと

54号　イースター号

2006.4.3　日本バプテスト同盟　金沢文庫教会

復活の主は今も活く

白根　新治



中国の文化革命はキリスト者にとって大いなる試練の時であった。

当時、北京でピアニストとして活躍していたルーク・クーは若き日に牧師であった父親に反発し共産党に入党していた。ところが、紅衛兵からつきあげられた。

「お前はキリスト者か」、「そうではない」「然しお前の父親は牧師だろう」何度も何度もきびしい尋問をうけた。終に彼は「そうだ、私はクリスチャンだ」と答えた。

すると「キリストは十字刑にされた、お前も同様だ」と、長い釘を彼の上唇にハンマーで打ちつけた。そのため上歯は4本も折れ、顔も変形してしまったという。迫害を恐れ、中国のクリスチャンは地下に潜った。その後二十年、もう中国ではキリスト教が根を絶たれたと思ったが、なんと今日6万人―7万人の人々が復活のイエスに出会って、伝道の意欲に燃えて活躍しているという。驚くべき事が今中国で起っている。ハレルヤ！

何を信じ、誰を信じる？

中山将太郎

人間は信仰なしでは生きられない。たとえば、電車に乗ったり、飛行機で海外へ出る時、電車が脱線したり、飛行機が落ちないことを信じて乗る。

数年前のテレビで、ある年老いた、かつての温泉旅館の仲居さんが、孤独で苦しい生涯を生きて来れたのは、瀬川瑛子の「命くれない」の御陰だといい、瀬川瑛子は彼女の神様、「命くれない」は、彼女の聖書だといった。そこで、テレビ局は、わざわざ「老人の日」に特別番組を組み、インタビューの後、本物の瀬川瑛子が突然現われ、彼女一人の為に、「命くれない」を熱唱、彼女は嬉し泣きに泣いた。

これが彼女にとっては信仰であり、他人がとやかく言う筋合いのものではないが、少し情けない気がする。こんな人に、イエスが救い主である。イエスを信じなさい、といっても無駄である。

では、私の場合、どのような天路歴程を経て、イエスを信じるに至ったのか？　話せば長くなるが、とにかく、ずいぶん遠廻りをして来た。とくに仏教に深く首をつっこんだ。無教会主義にも心酔した。そして最終的に、教会を通してイエスに接し、今日に至っている。

私はよく求道者に、満天の星空を見んことを勧める。多くの星が何百億光年の彼方から、光を放って、私たちの目にとどく。光は一秒に地球を七まわり半する。その光が一億年かかってとどくのが一億光年の距離であり、私たちが今見た星がまだ存在しているとは限らない。

こんな想像もできない大きい宇宙は一体誰が造ったのだ？　科学者は簡単に言う。それは、ビッグバン説で解明しているように、一三五億年前に、ピンポン玉位の大きさの10^nのエネルギーが突然爆発し、今でもロケット以上の速さで拡張し、今日の宇宙ができ、四五億年前に太陽と地球ができたのだという。

では、私は彼らに聞く；①誰がその10^nのエネルギーに火をつけたのか？　②今でも継続拡張しているとすると、宇宙の周囲はどうなっているのか？　一人として、答えられる科学者はいまい。

それは自然而然に在ると答えるのがいるが、「自然而然」なる言葉自体が科学的でない。科学は三次元の自然界を解明する学問でしかない。しかるに、宗教、死後の世界ならびに霊界などの問題は四次元以上の世界に属する。故に最初に始めもなく、終りもない「在りて在る者」なる創造主ヤハウェの神がいなければ、一切は始まらない。

では、それなら、そのヤハウェの神を見せよ、そしたら信じてやる、と人は言う。勿論私にそんな力はない。また、かりに神を見せることができたら、苦労して伝道する必要もない。また我々の目で本当に神を見たら、目が瞬時にしてつぶれてしまう。太陽さえ五分も見つめられない人間が、万軍の王、主の主である神を直接見ようとするお前は一体何者なのだ！

幸にして私たちはイエス・キリストを通して父なる神を見る

ことができる。

元来宗教には、多神教と唯一神教がある。唯一神教だから、私たちキリスト教の神とユダヤ教の神や回教のアッラーは、皆完全に同じだと考えてはいけない。私たちの神は、三位一体の神で、H_2Oが時に固体の氷になり、液体の水となり、また気体の水蒸気となるように、質は同じだが、違った形をとることがある。すなわち、父なる神、御子イエスと聖霊に分けて考えることができ、私たちは今、主の再臨を待ち望み、聖霊に依って導かれる新約時代に生きていることになる。

神を見た者は、まだひとりもいない（Ⅰヨハ、四：十二）、だから私たちは、二千年前、人類の歴史上存在した人かつ神に在ませられるイエスを通して、真の神を見るのである。故にヨハネは、ヨハネ伝の冒頭で：「初めに言があり、言は光であり、光が人の形をとってこの世に来た」のであり、これがイエスの「受肉」だといっている。

事実上イエスは、はっきり言われた：「わたしを見たのは、父なる神を見たのであり、わたしの元を経ないでは、父の御元に行けない！」といわれた。事実上神でなければできないような奇蹟をたくさん三年の中に行い、多くの病を癒し、悪魔を追い払い、福音を宣べ伝えた。そして最後には、旧約（とくにイザヤ書）の預言、ならびに御自身の預言通り、世の罪人らの贖いとして、御自ら十字架におかかりになった。

釈迦やマホメットは安らかに死んだ。ただイエスだけが罪人らの為に、鞭打たれ、唾棄され、嘲笑侮辱されて、十字架の上で息を引きとられた。しかも、その時、また父なる神に：「彼らをお赦し下さい。彼らは何をしているのか分らずにいるのです！」ととりなして下さった。

幸にして、イエスは死して葬られ、三日目に死人の中より、よみがえられた。そして四十日間もの間、ガリラヤを中心に、引き続き福音を宣べ伝えられた。さもなければ、命からがら逃げ散った弟子たちが戻り、福音の証しびととして殉教することはなかったのである。だから私たちは死人の中にイエスをさがしてはならない。イエスの復活は十字架と切り放して考えてはいけない。これらの事実を記載した福音書、とくにマルコ伝は紀元六十年頃にはすでに公になっており、イエスの復活、昇天に接したユダヤ人の証しびとはまだまだたくさん生き残っていたので、嘘は書けない。

故にパウロは：「もし福音を宣べ伝えないなら、わたしはわざわいである」（Ⅰコリ、九：十六）といい、また「もしキリストがよみがえらなかったとしたら、わたしたちの宣教はむなしく、あなたがたの信仰もまたむなしい」（Ⅰコリ、十五：十四）といった。

年一回のイースターを迎えるに当り、私たちはクリスマス以上に喜び祝わなければならない。なぜならば、私たちの信ずる主は、今でも復活を通して生きておられるからである。

恐れない

中川　澄子

恐れない　いつも感謝の　事ばかり　十年の病い　神をみつめて
吾れのみが　高令のよう　世話をする　主人の健康　今日も祈りつ
病い卒え古希を忘れて　山登り　小イサキ山も　冨士のよろこび
十年ぶり　山路を歩む　ハァハァと　友のまなざし　前にうしろに
がん告知　十年が過ぎ　山歩き　神の先導　平安の日々
ハネムーン翁のこけし　買い飾り　今金婚の　ゴルフ楽しむ
（グランドゴルフです）
いつもお祈り感謝です　感謝です

古希を過ぎ思う事ども

梅谷　道子

私は、昨年末に古希を迎えた。一月三日、それぞれの予定を調整して全員が久しぶりに集まれた。小さな花束、寄せ書き、万年筆をプレゼントされ嬉しかった。いろんな話題で皆が楽しそうにしていた時、私は不思議な思いに浸っていた。卒業してすぐ就職した頃、毎日が楽しくて、「一生独身で、この仕事を貫くぞ!!」と固い決心をしていた。その通りにしていたら或いは方針を変えて結婚したとしても、相手が今の夫でなかったら夫、婿、嫁は、別の人生を歩んでいただろうが、三人の子供と孫二人は、この世に存在しなかった事になる。神のご計画だったのか、人間に自由を与えて戴いた結果の私の選択だったのか。感謝である。七十年の間には、悲しみ、悩みが無かったとは言わないが、比較的恵まれた日々だったと思う。夫の転勤であちこちへ行き、教会から離れていた時期、朝夕の祈り以外聖書を全く開かない日も長かった。ここに落ち着き、関東学院で、パートをやらせて戴いたおかげで、大井先生、犬塚先生、吉原先生方と知り合い、島田先生に薦められて、文庫教会の一員にして戴けた。走れば教会迄、三分という近さなので、礼拝、祈祷会、ひもとく会と、ほとんど出席できる。二番、三番の会は、出席者が、ほんの僅かで、本当に勿体ないと思う。今文庫教会には、病気の方、ご高令の方、悩みを抱えておられる方が多いので、祈祷会では、その方々の事を祈っている。ひもとく会では、ビデオを通して、いろいろな問題が提起され、自分の感想を述べたり、先生に疑問を投げかけたり、それぞれの意見に耳を傾けたり得る事が多い。先日は、上智大教授デーケン先生の「死」についてがテーマだった。長くなるので、今回はそれについて書かないが、私達夫婦は、揃って、二回ずつ癌の手術を受け、今も後遺症があるが何とか、普通に生活でき、これ又感謝である。今の時点で、私は「死」を恐れていないが、やり残してい

る事が山程あり、遺される者達への迷惑を考えると不安になる。神のみ心から離れた言動も多いので裁かれて、天国に行けなかったらという不安もある。先生方は、日々悔い改め、祈り、聖書を熟読する事が大切と、いつもおっしゃっている。納得しても、実行が伴わない自分が情けない。でも、この年まで護られたのだから、前向きに、神のみ心に添った生き方ができるように願っている。自分が、経験してない悩みや、苦しみは、本当にわかってあげられないかも知れないが、せめてこの教会で兄弟姉妹となった方々、家族、親類、友人達の為に祈り続けたいと思っている。

オルガンの清き調べに頭たれ
兄弟姉妹の　幸せ祈る
世の中に　悲しき事の多かれど
住き日来ること　信じ歩まん

何回か書かせて戴いたので、重複した文章が多いが、お許しの程を。

♪賛美・さんび・讃美・サンビ・SANBI♪

鈴木　敦子

礼拝の中で、私たち会衆が参加できるもっとも大切な役割は賛美です。賛美歌のポケットをいっぱいにして、そこからたくさんの賛美を捧げることができたらどんなに素敵なことでしょう！　知らなかった賛美歌をたくさん覚えて（もしかしたら作って？）からだ中で賛美しましょう！

礼拝は神様からメッセージを頂いて喜びに満ちた　お・ま・つ・り。

賛美は私たちを元気にしてくれます！

皆さんご一緒に声高らかに！皆さんが聖歌隊です！

「ハレルヤ。
新しい歌を主に向かって歌え。」

詩編149：1

パプテマスを受けて

伊藤　さく

白根牧師様

この度受洗について種々御指導賜りまして本当に有難うございました。又私のつたない句を御所望くださいまして感謝でございます。

御笑覧頂ければ大へんうれしうございます。

クリスマスの朝、天気に恵まれ晴れやかな気分で教会え向う道々美しい空を仰ぎ見ながら詠んだ句です。更に四本のローソクを前に感動極まる受洗の後、帰宅途中に浮びました句ですが、歩みとあるのは私の心の歩みのつもりでございます。今後も何卒よろしく御願い申上げます。

街角に　ジングルベルが　鳴り響く　輝く空の　美しきかな

クリスマス　頭（こうべ）を垂れて　跪（ひざまず）く　歩（あゆ）みを照らす　灯（ともしび）あらむ

バプテスマを受ける決意

根岸千恵子

何事も誰かが作らねば物は形にはならないと思うのですが、生物のそれぞれの種は進化論であると言われているが、今以上に何故進化しなかったのかと単純な疑問を持ちました。神様がアダムの骨からイブを作られたと聖書の一節にある様に、人間はDNAを解明し、細胞の一部からクローン人間を作る技術を得ました。これらの事を思う時、アダムがリンゴを食べ神様にそむき、神様の裁きを受けた様に、人間も大きな罪を犯した様に感じました。この複雑で精巧な人体の構造を知る時、神様の創造物であると信じられるのです。日毎に戦争や犯罪が多発し、人のやさしさも少しづつ失われている、これらの事を考える時聖書の言葉は真実であると、思う事が出来ました。日々の生活での悲しみ、苦しみ、不安等で気持ちの安らぐ事も少なく、穏やかに生きるには、信仰の道しかないと考える様になりました。決心がつかなかったのですが中山様に声をかけて頂き感謝です。教会に集い、聖書を学び信じて、その事を行える者となり、感謝の日々を送りたいと思います。

追伸

ここに書きました細胞の一部から人の臓器を作る技術を得たと言う説ですが、最近韓国の教授が自分の捏造であったと発表されました。申しわけありません。

「信仰の歩み」

堀田　政夫

05年12月25日、受浸をひかえた信仰告白にあたり、前夜、寝つけぬままに、いままで幾度かの、このような機会を得たかもしれなかった場面を、再び強く想い出しました。

今から40年ほども前になりますが、会社の独身寮に居て、その後に神学校へ行くために退職した一年先輩、同期入社でありながら、どこをどう巡ってここに居るのか不明な、数才年長の怪人などと、議論の中味は記憶にないものの、青春真唯中の若者達が口角泡を飛ばす議論と言えば、ありきたりの事柄であったでしょうが、すでに信仰のある二人の異常な熱気に、やっとのことで距離を置くほかに、何が彼等をしてこれほどまでに信念を駆り立てることの不可解さと、ちょっぴりのうらやましさは妙にはっきりと覚えています。

当時は、某団体による入信勧

誘の手法が、社会問題になっていた時代でもありましたが、今にして思えば、目指す道程は異なっていても、一人ひとりが自分を見つめ、そこから社会を成員としての一個の人間のありようを考える自立心は健在で、今よりもずっと健全であったと言えるのかもしれません。

いずれにしろ、その時代に染まっていたとは言え、私の力は会社での聖書研究会や、街角で勧誘されて飛び入った教会での経験を加えても、到底のこと、入信に結びつくまでの蓄積には及びもつかなかったのです。

既に信仰を持つ妻と結婚した時には、会社の生活では応分の責任も負い、早期から深夜までの勤務が続くなかでは、時折りに自らを省りみる機会が訪れたにしても、立止まることなく、こころ引掛かりはやり過ごすことに、それほどのためらいは覚えなかった。あるいは覚えないように自己規制したように思います。

二男が生まれた時に、上大岡の社宅から現在地に移転し、歩いて5分の距離にあるこの教会に妻が礼拝できるようになっても、私が礼拝に行かない方便は、会社の業務が実に繁忙であったことは事実にしても、仕事のおもしろさ、忙しさを言うことの方が、自らを見つめ直すことよりも楽であり、重くないといったことに尽きます。

しかし、それよりも何よりも、教会へ向かおうとする足を止めたのは、私の心の持ちようを信じていなかったことにあったのです。「信仰」の前に、単に知識欲、単に西洋を視る切口へのアプローチなどなど、自らをうしろめたく感じた気持ちがあり、「資格なし」と自らも断じていても、進むでもなく、かといって背を向けるでもなく、経めぐることと、こねくりまわした虚像をもとにした反発のとりこになってしまい、自らを縛っていたのです。

とは言うものの、時折には礼拝の末席に居たり、妻のたのみの教会の雑用をこなしたりする間に、私なりに不安の根っ子を見据えるときに、きちんと信仰に向きあわない私の態度が許しがたく、この思いはだんだんと大きく、激しくなる一方でした。結着をつけたいと思いつつも、踏み出せない不安やら苦しみやらの毎日でした。

奈良市内に一人で泊まっていた9月3日のことです。夕食もそこそこに済ませた後に、携帯電話を握ったまま、一時間たち、二時間が過ぎ、私は石のように固まったまま、息もひそめて座り込んでいたようです。妻を通して、白根牧師へ私の受浸の願いを伝えてもらう電話を掛けようとしていたのです。

その時までに、私が教会で聴かせていただいた説教のかずかず、眼のあたりに見る白根牧師の生きる姿、大井牧師の元気な頃から、病を得てからの御自身との向き合い方、そして中山先生の「いつまでシンパで居続けるのか」との正す言葉、時も同じ頃に、なぜか「生きる」よりも「生かされる」と変化した私における言葉の使い方の変わりようなど、すでに眼を逸らし続けることの誤まりであり、苦しいことを自らが納得していた筈なのに、いざお願いするときに、一体に何をためらっていたのだろうか。既に信仰を持った人は、一歩を踏み出す時には足元の溝

も、へこみとしてしか気にもとめないであろうが、その時の私は、向岸も見えない大河を前にして途方に暮れていたのです。

何がどうとの事柄は省きますが、私なりに心の整理が終った時には、4時間が経とうとしていました。

10秒にもならない伝言を終えた時に、私は音も光も、重力さえない空間を、長いあいだ漂っていたようです。

顔の向きは定まりました。そしてその日から受浸の今日までの4ヵ月間は、何と安らぎと伸びやかさを得、そして顔を上げて教会の扉を入れたことか。

皆様には判っていただけると思います。

教会への5分間ばかりの坂道をたどる時間は、ただただ愚直に信仰が続けられることを念じている時間なのです。

いま、受浸の場に立つときに、何と回り道をしたことか、悔やみきれない歳月ですが、これを禍いとだけ思わないことにします。

皆様の後押しで、遥かに山頂を望める場所に立たせてもらいました。改めて妻にも尽くせぬ感謝を表わすものです。

そして中山先生に言われたように、私自身の信仰を深めるとともに、信仰を前に足踏みする人の手助けの役目をも負うことを自覚するものです。

ありがとうございました。

編集後記

キリスト者にとって大事なのはクリスチャンプレゼンス（キリスト者がそこにいるということの大切さ）である。先に天に召された山崎姉の存在そのものが、世の光であり、地の塩であった。しかし四角四面な固さではなく、常に柔和でスマイルが絶えなかった。

礼拝においでになると必ず一番前の席に坐り御自分の名前の如く静かに祈るのが常であった。

大船病院に入院して療養されていたが、三月の初め天に召された。ヨハネ黙示録に「今から後、主にあって死ぬ死人はさいわいである」（14、3）とあるが、静子姉はまことに神の賜う平安の中にあったことを強く印象づけられた。彼女は死ぬれども今も信仰において活きているというのが、クリスチャンプレゼンスの最たる姿であろう。

今回は昨年のクリスマスに三名の方々がバプテスマを受けられた。

長い人生の戦いを味わってこられた方々である。己の罪を認め、これが主の十字架の贖罪の業によって赦され主の復活の出来事によって救われ、大いなる希望、歓喜を与えられたものである。

「わたしは知る。わたしをあがなう者は生きておられる。後の日に彼は必ず地の上に立たれる。たとい蛆この体を滅すとも、わたしはわたしの肉にあって神を見るであろう」（ヨブ19・25～26）

「しかし、今やキリストは眠った者の初穂として、死人の中からよみがえったのである」（第一コリント15・20）

甦りの主、死に勝利し給うた主を信ずる者の上に祝福あれ。

発行日　二〇〇六年四月三日
発行所　日本バプテスト　金沢文庫教会
発行者　牧師　白根新治
印刷所　㈱高陽印刷所
住所　横浜市南区白妙町3―39
電話　〇四五―二五一―四八三二